AT（姶良 Tn 火山灰）上位のナイフ形石器文化
── 宮崎県における最近の調査例から ──

橘　　昌信

1．はじめに

宮崎県内において今日まで約 80 か所の旧石器文化の遺跡が知られているが，その大半は宮崎県中央部の児湯郡地方の表面採集によるものである。

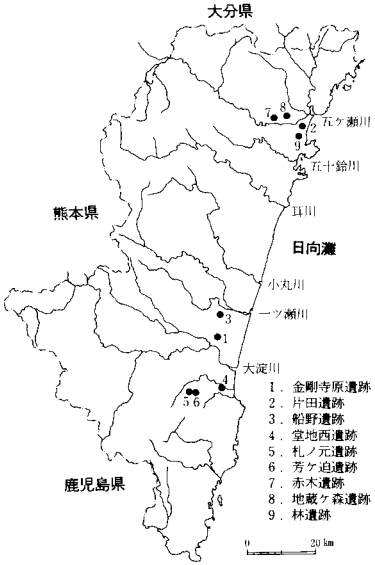
宮崎県での旧石器時代遺跡の発掘調査は，1960 年代後半から 70 年代前半にかけて，県北の五ヶ瀬川上流域の出羽洞穴，同下流域の岩土原遺跡，宮崎平野の船野遺跡などが行われているが，その後しばらくは旧石器時代遺跡の発掘調査は行われていない。

しかしながら，1980 年代以降においては，宮崎平野を中心とした地域で，堂地西遺跡（宮崎市）を始めとして持田中尾遺跡（高鍋町），妻道南遺跡（高鍋町），下田畑遺跡（清武町），芳ケ迫第 1 遺跡（田野町），札ノ元遺跡（田野町），新村遺跡（野尻町）などの発掘調査でナイフ形石器が発見されている。一方，県北の赤木遺跡（延岡市），林遺跡（延岡市），後陣遺跡（日向市）などの調査が実施されている。

これらの調査の中で，とくに堂地西遺跡や芳ケ迫第 1 遺跡・札ノ元遺跡，さらに赤木遺跡においては，姶良 Tn 火山灰（AT・第 2 オレンジ）が検出されており，それとの関連で遺物包含層が把握されている。

さらに 1988 年から 90 年には，宮崎平野の金剛寺原遺跡および五ヶ瀬川下流域の片田遺跡の発掘調査が，宮崎市と延岡市のそれぞれの教育委員会で行われており，姶良 Tn 火山灰層（AT）の上位からナイフ形石器文化の好資料が発見されている。

この両遺跡について発掘調査および資料見学の機会が幸い与えられたので，両遺跡を中心に宮崎県下の AT 上位のナイフ形石器文化について，若干の所見をまとめてみたい。



第1図　宮崎県におけるナイフ形石器文化の主要遺跡

2．金剛寺原遺跡

金剛寺原遺跡は県営瓜生野地区農免農道整備事業に伴う事前調査として宮崎市教育委員会が実施している。

遺跡は都濃－綾，青島－綾を結ぶ地形区分線と東側の海岸線で囲まれた三角形を呈する宮崎平野のほぼ中央部に位置し，南側には大淀川とその支流である本庄川との合流地点が控えている。金剛寺原遺跡は標高約60 mの舌状台地の末端近く立地し，東西に約600 m離れて金剛寺原第1遺跡と金剛寺原第2遺跡が存在する。金剛寺原遺跡に近接して，ナイフ形石器が発見された遺跡として古くから知られている垂水公園遺跡が所在する。なお，金剛寺原遺跡の地番は，宮崎市大字瓜生野字金剛寺原・大瀬町字中尾である。

両遺跡とも農免道路整備事業に伴う限られた区域での発掘調査と言う制約で，遺物の包含が予想されながら未調査の部分が残されるなど，遺跡の全体を把握する上で幾つかの問題を残すことになろう。また，それに起因して金剛寺原遺跡の特徴を抽出，あるいは他の遺跡との比較検討する上で，多少の支障が予想される。しかしながら，姶良 Tn 火山灰層（AT・第2オレンジ層）の上位に単一の石器群が認められることは，宮崎県下のナイフ形石器文化を考察する上で重要視される。

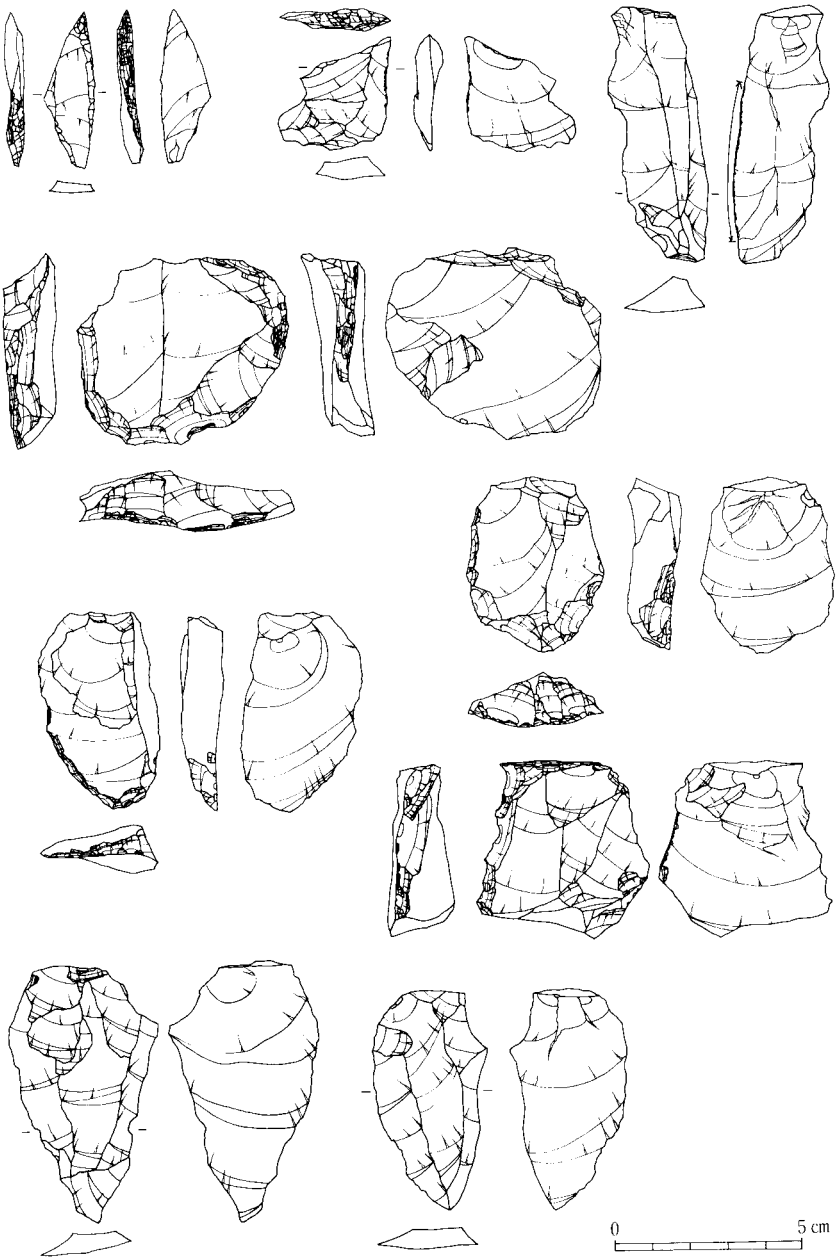
そこで，まずこの遺跡の時間的位置づけを考える上での重要な一つの要素となる出土層序について見ることにする。

金剛寺原第1遺跡の石器群は，明褐色土層から出土している。その層の直下に，AT（第2オレンジ）のブロックが部分的に認められ，また，AT が風化したと考えられる土層（風化軽石層）が堆積している。このことから，金剛寺原第1遺跡での石器群の出土は，層位的に AT 直上と考えて大過ないであろう。

一方の金剛寺原第2遺跡については，第3層の明褐色ローム層から石器群および集石遺構が検出されている。当遺跡での AT の層序は，第4層の暗褐色硬質土層を1枚挟んだ第5層に位置しており，ブロツク状，あるいは土壌化した状況で認められる。このことから，金剛寺原第2遺跡では明らかに AT より上位に石器群の包含層が存在することになる。

金剛寺原第1遺跡と金剛寺原第2遺跡とは近接した距離に立地しているが，土層および石器群の出土層位について直接的な対比は困難である。しかし，AT や AT の風化土層を参考にすれば，第2遺跡の方は遺物包含層と AT との間に1枚別の層がかんでいることから，層序的には第1遺跡は AT の降下堆積時に極めて近い時期が考えられ，第2遺跡はそれよりも新しい時期と判断できる。

出土石器群の特徴について見ることにする。金剛寺原第1遺跡出土の石器総数は約220点であり，それらの中でまず目を引くのは，掻器・削器（スクレイパー）の存在である。当遺跡出土石器類の総数の約15％を占めており，石器だけでの全体の比率は実に約30％をも占めているのである。これらのスクレイパーは数量的に卓越しているだけでなく，その種類もエンド



第２図　金剛寺原第１遺跡主要出土の主要石器

スクレイパー・サイドスクレイパー・ノッチドスクレイパー・コアースクレイパーと極めて多彩である。特にエンドスクレイパーは九州地域のナイフ形石器文化遺跡にあっては希有な存在として注目される。

旧石器文化の指標されているナイフ形石器は，金剛寺原第1遺跡ではわずかに4点と少ない。二側縁加工・一側縁加工それに部分加工のナイフ形石器が見られるが，数が少ないこともあって特徴を抽出することは難しいようである。

外に，剝片の一部に二次的な調整加工を施した二次加工のある剝片石器，剝片の側縁に使用によるものと考えられる微細な刃こぼれ状の痕跡が観察される使用痕剝片などが出土している。特に使用痕剝片はスクレイパーの量をさらに上回り，石器全体の40％にのぼっており，当遺跡における石器組成での大きな特徴とされよう。

剝片石器の素材となる剝片生産のあり方を端的に示唆する石核は，打面と剝片の剝離作業面がほぼ固定して，主として縦長剝片を目的とする剝離が行われているもの，打面転移を繰り返しながら剝片の幅と長さの比率が1：1前後の剝片を剝離しているもの，さらに打面と作業面とを交互に逆転させながら幅広の剝片を目的に，剝片剝離が行われているものに三大別できよう。

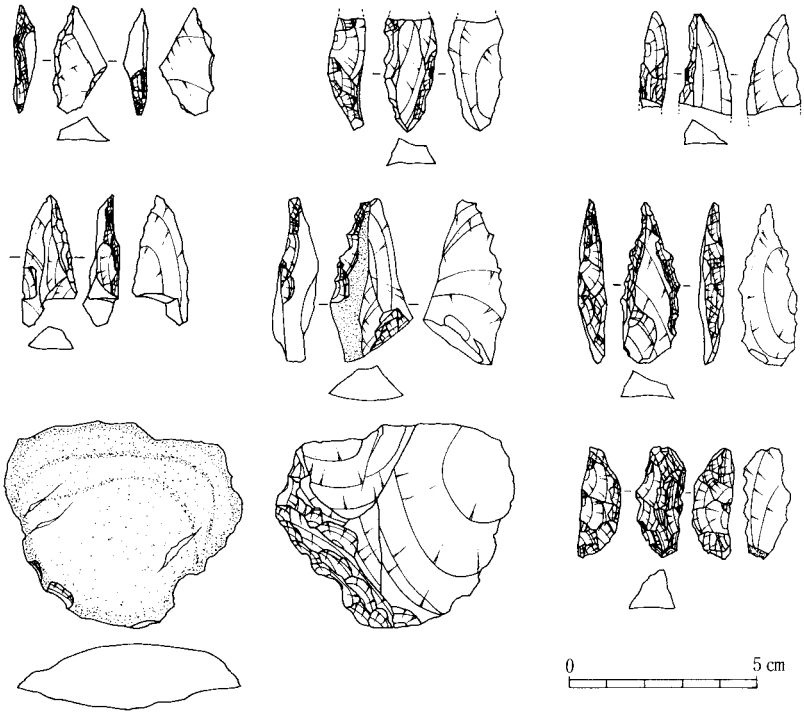
これらの石核は三種類に大別できるが，剝片や剝片石器の素材から，全体的に1：1よりも縦に長い剝片が多数を占めており，この遺跡での剝片剝離の主体は，縦長剝片剝離技術と考えられよう。

次に，金剛寺原第2遺跡の出土遺物について触れることにする。

この遺跡での旧石器文化の遺物総数は200余点で，主要な石器としてはナイフ形石器，削器（スクレイパー），二次加工剝片，使用痕剝片，それに1点であるが角錐状石器が見られる。

ナイフ形石器は8点出土しており，二側縁加工・一側縁加工・部分加工のものが含まれている。一側縁加工のナイフ形石器の中に横長剝片を素材に用いたものが有り，これは金剛寺原第1遺跡では認められず，金剛寺原第2遺跡を特徴的づけるナイフ形石器である。

このナイフ形石器と同様に，横長剝片を素材にした横断面がほぼ三角形



第3図　金剛寺原第2遺跡出土の主要石器

をした角錐状の尖頭器もこの遺跡の時期を考える上で一つの指標とすることができよう。

削器（スクレイパー）は7点出土しているが，この中には第1遺跡で持徴的であつたエンドスクレイパーが全く見られず，全般的にスクレイパーは発達してない。

第2遺跡では剝片剝離技術を知ることのできる石核の好資料に恵まれていないが，80点ほど出土している剝片から第1遺跡との剝片剝離技術の対比がある程度可能である。第2遺跡は第1遺跡に比較して横に長い剝片を剝離する剝片剝離技術が勝っている。実際，ナイフ形石器，削器（スクレイパー），二次加工剝片，使用痕剝片などの剝片石器には，横剝ぎ素材のもの

が多く認められ，このことを裏づけている。

金剛寺原第１遺跡と第２遺跡は互いに近距離な位置に立地しているが，石器群が包含層されている地層の違いの外，両遺跡とも十分な資料が揃っていると言い難いものの，石器組成やナイフ形石器・スクレイパーの形態的技術的の相違，さらに主体的な剥片剥離技術が異なることなどを抽出できそうである。この両者は近距離に立地していることから，その違いは時間的なことに起因していると考えられる。

３．片田遺跡

片田遺跡の調査は，土地区画整理事業に伴う事前調査として，1989 年から 90 年にかけて，延岡市教育委員会で実施されている。

遺跡は五ヶ瀬川下流域南側の愛宕山（標高 251.2 m）から南に延びる低丘陵上に立地しており，遺跡の標高は 15～18 mを測る。なお遺跡の地番は延岡市大字恒富乙２９番地字狩迫である。

土層の堆積状況は南に延びる台地の東西で異なりを見せるが，基本層序は以下のように観察される。第II層は黄褐色土層，第III層は黒褐色粘質土層で，第Ⅳ層がATAT層およびATが風化土壌化したと考えられる黄褐色土層である。さらに，第Ⅴ層は黒褐色粘質土層で，第Ⅵ層は黄褐色粘質土層である。

約 1000 点の石器類は第III層を中心に出土しているが，第Ⅳ層上部にも一部かかっているような出土状況を示している。

石器類の種類は極めて豊富で，ナイフ形石器を始めとして，掻器・削器（スクレイパー），抉入石器，彫器，角錐状石器，石斧，細石刃，二次加工剥片，使用痕剥片，敲石，台石，細石核，石核，剥片，砕片などが出土している。

これらの石器類が全て同一文化の所産とは考えられないが，層位で明確に区分することは困難のようである。ただ，これらの石器群の平面的な出土状況から，10 か所ほどの視覚的な石器群の集中分布域（ブロック）を抽出することができそうである。また，各ブロックの石器組成，石材の個体別

資料化から2～3の時期に分かれることが予想される。

ナイフ形石器は破片・欠損品を含めて30点ちかく出土しており，二側縁加工・一側縁加工・部分加工などが有り，素材の剝片には縦長の形の整ったものを主体に用いているが，横に長いものや不定形な縦に長い剝片なども使用されている。

二側縁加工のナイフ形石器の中には，両設打面の石核から剝離された縦長剝片を素材に用いたものが含まれており，また二側縁加工で小形の切出し形のものが見られる。

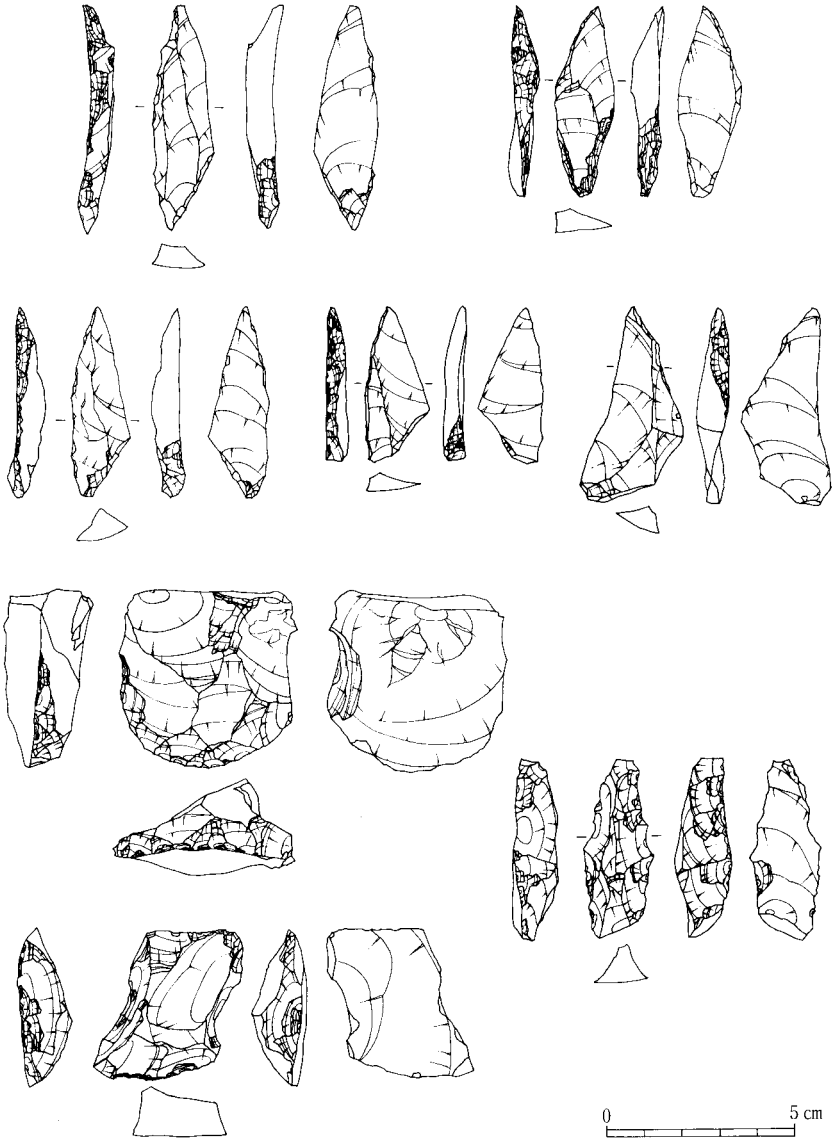
縦長剝片を素材にして二側縁加工を施したナイフ形石器は同一ブロックと考えられる平面分布を示し，しかも層位的にもATの風化土層と判断できる土層中の上部近くおよびその直上に集中するような出土状況である。平面分布およびその出土状況から判断して，複数のナイフ形石器文化の時期が考えられる片田遺跡の石器群の中にあつて，一つの時期の存在を示唆している。それも，ナイフ形石器の素材や形態さらに加工の状況などから，これらのナイフ形石器を含むブロックが，AT直上の時期のナイフ形石器文化である可能性が考えられる。

掻器・削器（スクレイパー）は先の金剛寺原第1遺跡と同様に，この遺跡でも数が多く40点を越えている。スクレイパーの中には，厚手で縦長の剝片を素材に，打面と逆な一端に急角度の整った刃部を形成しているエンドスクレイパーが存在する。

AT上位のナイフ形石器文化の石器組成として，この遺跡では全般的にスクレイパーが発達していることを一つの持徴として挙げることができる。抉入石器として分類されている石器も15点以上存在するようで，これらはコンケイブスクレイパーとして，スクレイパーに含めて考えることができ，この遺跡でのスクレイパーの質量の充実を補強するものと思われる。

角錐状石器は2点出土しており，その1点は長さが5cm足らずの比較的小形のもので，厚めの縦長剝片を素材に両側縁からの大小の剝離が施されている。全般的に二次加工は粗く，基部には縦長剝片の打面が残されている。

この角錐状石器がどのようなナイフ形石器に伴うか，興味が持たれると



第４図　片田遺跡出土の主要石器

ころである。片田遺跡では僅か2点のみであるが，平面分布では縦長剝片素材の二側縁加工のナイフ形石器のブロックとは異なるようである。

片田遺跡ではこれらの石器の外，先に列記したように豊富な種類の石器が出土しているが，その中に剝片尖頭器が1点も認められない。このことは，片田遺跡の，また，宮崎県内のナイフ形石器文化の石器群の様相や時期を考える上での重要な一つの要素として，とらえることが出来よう。

さらにこの遺跡では，船野型細石核が出土している。個体別資料の検討から，この細石核とナイフ形石器との共伴関係の可能性が示唆されており，複数のナイフ形石器文化での一つの時期が予測されそうで特別問題視される。

以上の最近調査が実施された二遺跡でのAT上位のナイフ形石器文化の特徴およびその時間的位置付けについて，ATと文化層の関係が明らかにされている宮崎平野と五ヶ瀬川流域の主要なナイフ形石器文化の遺跡を参考にしながら，若干の予測を試みたい。

4．石器群の特徴と時間的位置づけ

宮崎平野周辺の遺跡群と金剛寺原遺跡

金剛寺原遺跡が所在する宮崎平野を中心としたしたこの地域で，ナイフ形石器を特徴とする石器群が，姶良Tn火山灰（AT・第2オレンジ）との関係で把握されている主要遺跡として，船野遺跡（佐土原町）・堂地西遺跡（宮崎市）・札ノ元遺跡（田野町）・芳ケ迫第1遺跡（田野町）などを挙げることができる。

宮崎平野で最も早い時期に発掘調査が実施された船野遺跡では，ローム層の最上部から石器群が出土し，AT層との間に30～40cmの無遺物層を挟んでいる。ローム層の最上部に文化層が存在するていう層位的なことから，金剛寺原第1遺跡・第2遺跡よりも新しい時期が考えられる。また，当遺跡の石器群は小型のナイフ形石器と細石刃・細石核との共伴が示唆されており，ナイフ形石器文化と細石器文化との過渡的な時期が予想される。船野遺跡は層位的にも，石器群の様相からも金剛寺原遺跡よりも明らかに

新しい時期が与えられる。

堂地西遺跡は学園都市建設に伴う発掘調査として宮崎県教育委員会で実施されたものである。

AT 層（第2オレンジ層）直上の 10 cm前後の漸移層を挟んだ上位のＶｂ層に，ナイフ形石器文化の包含層が認められる。出土層位では金剛寺原第1遺跡と比較的近似しているようである。

この遺跡の石器群で最も特徴的なのは，縦長剝片を素材にして一側縁と基部に二次加工が施されている剝片尖頭器とナイフ形石器の存在である。その反面，金剛寺原第1遺跡で特徴的な掻器・削器（スクレイパー）は堂地西遺跡で全く出土していない。また，石材の面でも，堂地西遺跡では砂岩系のものが多用されているのに対し，流紋岩（ホルンフェルス）を主体にする金剛寺原遺跡とは様相を異にしている。

一方，金剛寺原第2遺跡出土の横剝ぎ素材で一側縁加工のナイフ形石器は，堂地西遺跡においても発見されており，このことは両者が比較的近い時期であることを示唆するものであろう。

宮崎平野南部に所在する芳ケ迫第1遺跡は昭和 58～59 年にかけて発掘調査が実施されている。

第Ⅷ層の AT（第2オレンジ層）を含む礫層の直上からナイフ形石器・剝片尖頭器などが発見されている。これらの石器は堂地西遺跡と類似しており，また，当遺跡ではこの外に，定形的な石器として三稜尖頭器（角錐状石器）・彫器が見られる。三稜尖頭器（角錐状石器）は金剛寺原第2遺跡で発見されているものと，形態的には多少違いが認められるが，第2遺跡との時期の対比を行う上での一つの資料とされよう。

この際，両遺跡の遺物出土層位が問題になると思われる。すなわち，芳ケ迫第1遺跡では AT が検出された礫層直上で石器群が出土し，金剛寺原第2遺跡では AT と間層を挟んだ上の層という違いである。この点については，礫層中に AT が認められる場合は，その AT が必ずしも礫層の堆積時期をそのまま示していると考えられないであろう。そこでこの遺跡での AT と遺物包含層との層位的な関係は他遺跡と事情が異なると考えられる。当遺跡の石器群の時期については，層位的に AT 堆積直後の可能性は

低く，石器群の様相から，AT 直上の金剛寺原第 1 遺跡よりも第 2 遺跡に近い時期を与えることが出来よう。

札ノ元遺跡は芳ケ迫第 1 遺跡と 300 m前後の近接した地点に立地しており，発掘調査の結果，第Ⅶ層からナイフ形石器・石核・剝片などが出土している。この遺跡で AT 層に相当する層は，石器包含層との間に 1 枚の間層を挟んだⅨ層である。石器群の出土総数が少ないこともあり，金剛寺原第 1 遺跡・金剛寺原第 2 遺跡と直接対比できる石器は見当たらないようである。

五ヶ瀬川流域の遺跡群と片田遺跡

片田遺跡が所在する五ヶ瀬川流域でナイフ形石器が出土している旧石器文化の遺跡に目を転じてみると，赤木遺跡（延岡市）で好資料が出土している。

この外，最近調査が実施された地蔵ケ森遺跡・林遺跡（延岡市）などを挙げることができる。

赤木遺跡では，Ｖａ層の下部からＶｂ層直上にかけて細石器文化の石器群（赤木第Ⅱ文化層）が，さらにＶｂ層の下位を中心にナイフ形石器文化の石器群（赤木第Ⅰ文化層）が発見されている。この遺跡での AT 層は，20 cmほどの厚さを有するⅥ層を挟んでⅦ層に存在する。

ナイフ形石器文化の石器群としては，ナイフ形石器 36 点を始めとして剝片尖頭器 3 点，三稜尖頭器 6 点，それに敲石 3 点，スクレイパ 1 点などが定形的な石器で，外に二次加工剝片・使用痕剝片が 27 点出土している。

ナイフ形石器は二側縁加工で細長い形態のいわゆる九州型のものと切り出し形とを主体にしているが，横剝ぎ素材の一側縁加工のものも見られる。剝片尖頭器は縦長剝片を素材に，加工は基部の両側に施されているものとさらに一側縁にも及ぶものとが存在する。三稜尖頭器は横断面が三角形を呈するものと台形のものとが見られる。

これらの赤木第Ⅰ文化層の石器組成およびナイフ形石器・尖頭器類の特徴は，九州地域の AT 上位におけるナイフ形石器文化の一時期での典型的な様相を示すものと考えられる。

先にのべたように片田遺跡は複数の文化層が予想されるだけに，赤木遺

跡との対比は現時点で出来ないわけであるが，若干の予測は可能であろう。

まず，層位では赤木第Ⅰ文化層はAT層との間に20cmほどの第Ⅵ層を挟んだ上位の第Ⅴ層下部に有るのに対して，片田遺跡ではAT直上からその上位にかけて包含層が考えられていることから，片田遺跡の石器群の一部は，層位的に赤木第Ⅰ文化層より古いものが存在すると考えられる。

次に，石器群については，片田遺跡の豊富な器種の中に剝片尖頭器が1点も出土していないことや，逆に赤木遺跡ではスクレイパが僅か1点しか発見されてないなどの，大きな相違が指摘できる。また，片田遺跡でATの直上と考えられる土層近くから，しかも一つのブロックを形成すると予想されるナイフ形石器などに認められる特徴が，赤木遺跡のナイフ形石器では見られないことも両遺跡の違いとされよう。これらの違いは，AT直上に出土層位がある石器群と，さらにその上位の層の石器群の差とも思われる。

延岡市小峰町の地蔵ケ森遺跡は昭和62年と63年に，農業整備基盤事業として宮崎県教育委員会で発掘調査が実施されている。ここでは第Ⅳ層に縄文時代早期の包含が，そして，Ⅵ層でナイフ形石器文化の石器群が発見されている。AT層が考えられる土層は，硬い黒褐色土と褐色土が混ざったⅦ層を一枚挟んだ下の層であるⅧ層黄褐色土層の可能性が高そうである。

ナイフ形石器は4点ほど出土しており，二側縁加工・一側縁加工さらに部分加工のものが見られる。外にはスクレイパー，石核，剝片などが発見されている。

地蔵ケ森遺跡の石器群の詳細について知りえない現在，片田遺跡および赤木第Ⅰ文化層との比較検討は出来ないが，この遺跡では剝片尖頭器，三稜尖頭器が認められてなく，赤木第Ⅰ文化層との時間的な先後関係が考えられる。それも尖頭器およびスクレイパーの有無や層位的なことから，地蔵ケ森遺跡の石器群が赤木第Ⅰ文化層に先行するものと予想されよう。

林遺跡は延岡市伊形町に所在し，沖田川の一支流である井替川の下流域の低丘陵に囲まれた水田地帯に立地している。この遺跡では，中・近世の陶磁器に混じって，ナイフ形石器・縦長剝片などが発見されている。旧石器時代の遺物の数は少なく，また，出土層位も明確でないが，ナイフ形石器文化の時期での「低地」という遺跡の立地は注目される。

5．AT 上位のナイフ形石器文化

最近調査が実施された2遺跡を中心に，宮崎県下における AT 上位のナイフ形石器文化についての二三の予察を行って結びとしたい。

まず，宮崎平野に所在する金剛寺原遺跡の第1遺跡と第2遺跡については，層位的なことおよび横剝ぎ素材の一側縁加工のナイフ形石器や角錐状石器の存在から，第1遺跡が第2遺跡に先行することを十分に予測することができよう。

金剛寺原第1遺跡の石器群は出土層位が AT 直上であり，石器組成に剝片尖頭器・三稜尖頭器，角錐状石器などの尖頭器類が含まれてなく，縦長剝片素材の二側縁加工のナイフ形石器と発達した各種の掻器・削器（スクレイパー）を主要な組成にしたナイフ形石器文化の存在が示されている。

この金剛寺原第1遺跡と様相を異にする遺跡の代表として，同じ宮崎平野の堂地西遺跡が存在する。

堂地西遺跡における石器群の出土層位は，AT 層との間に一枚別の層を挟んだ上位の土層に包含層が認められる。これは AT の降灰・堆積の時期と間層である土層が堆積するその後の時間の存在を示すものと，一般的に考えることができる。そこで AT 層直上の堆積層の存在は，堂地西遺跡の石器群と AT 直上の金剛寺原第1遺跡石器群との時間的な差を示唆するものであろう。

一方，石器群の内容も，金剛寺原第1遺跡とは極めて対照的で，堂地西遺跡の石器組成には，剝片尖頭器・三稜尖頭器，角錐状石器などの尖頭器類が含まれ，さらに横長素材で一側縁加工のナイフ形石器が加わっている。それに対して，掻器・削器（スクレイパー）には全く見るべきものがないのである。

堂地西遺跡に認められるナイフ形石器文化は，層位的にまた石器群の内容からも金剛寺原第1遺跡とは異なっていることから宮崎平野におけるナイフ形石器を主体とした一つの文化で，しかも金剛寺原第1遺跡に後続する時期を示すものと考えられる。

宮崎平野のナイフ形石器文化のあり方と同様なことが，宮崎県北部の五ヶ瀬川下流域の遺跡においても認められそうである。

片田遺跡の石器群については，今後の正式な整理や分析を待たなければならないが，宮崎県北部における AT 上位のナイフ形石器文化の様相についてある程度の見通しを立てることはできそうである。

まず，AT 直上に包含層が，しかも一つのブロックを形成されると考えられるナイフ形石器の石器群の存在が注目される。この石器群の組成では，縦長剝片素材のナイフ形石器と掻器・削器（スクレイパー）に特徴が見られる。しかも，素材の縦長剝片の中には両設打面の縦長剝片剝離技術の存在が窺えるのである。剝片尖頭器・三稜尖頭器（角錐状石器）などの尖頭器類や横長剝片素材で一側縁加工のナイフ形石器はこの石器群の中には含まれないと考えられる。

このような片田遺跡で予想される一つの時期のナイフ形石器文化の石器群とは異なる様相が，AT と一枚の間層を挟んだ土層に文化層を有する赤木遺跡において認められるのである。すなわちこの遺跡では二側縁加工のナイフ形石器に横長剝片素材で一側縁加工のナイフ形石器が加わり，それに剝片尖頭器・三稜尖頭器（角錐状石器）などの尖頭器類を含む石器組成の石器群の存在である。

結局，宮崎県中央部・北部共に，AT の降灰・堆積時期に近いころ縦長素材の二側縁加工のナイフ形石器とエンドスクレイパーなどの発達したスクレイパーで特徴づけられるナイフ形石器文化の一時期が存在したと考えられる。しかも，このナイフ形石器文化は，剝片剝離技術や縦長剝片素材の二側縁加工のナイフ形石器などに，AT の降灰・堆積時期直前のナイフ形石器文化との強い関連性が窺えるのである。

九州におけるナイフ形石器文化の新しい要素とされる剝片尖頭器・三稜尖頭器などの尖頭器類や横長剝片素材で一側縁加工のナイフ形石器は，こと宮崎県の中部・北部においては，AT の降灰・堆積直後の時期ではなく，金剛寺原第 1 遺跡や先に述べた片田遺跡の一部の石器群などの一時期以後に登場したものと思われる。すなわち，剝片尖頭器・三稜尖頭器の出現の時期と AT の降下・堆積の時期との間にある時間幅の存在が予想される。

6．おわりに

ATの降灰・堆積というアクシデントによる生活の変化の一端が，例えば剝片剝離技術や石器製作・石器組成などに，どのような影響を与えたのかは，極めて大きな課題である。

この課題については，あらゆる視野から詳細に検討しなければならないが，宮崎平野および五ヶ瀬川流域においては，ATの降灰・堆積による大きな変化は少なくとも石器の上では看取できそうもなく，むしろそれ以前の石器群に見られた特徴が引き続き存在することが予測されそうである。

九州のナイフ形石器文化において，剝片尖頭器・三稜尖頭器などの尖頭器類や横長剝片素材で一側縁加工のナイフ形石器などの出現は，AT以後に表れる大きな要素であることはほぼ確実とみなされるが，それらがAT直後の時期なのかどうかについては，さらに検証すべき問題である。また，新しい石器群の他地域からの影響についても，すべてが時期的に，そして，地域的にほぼ一直線に並ぶものかどうかについても同様である。

姶良カルデラの大爆発とその後の火山灰の降灰・堆積は，当時のナイフ形石器文化に何等かの影響を与えたことは想像に難くないが，同じ九州内にあっても地域によって多少の異なりが見られるであろう。

宮崎県におけるATの影響や新しい要素の他からの波及や受入れなどの問題については，片田遺跡・地蔵ケ森遺跡・林遺跡などの本報告を待って検討したい。さらに，宮崎県を取り囲む鹿児島県・熊本県それに大分県などのAT前後のナイフ形石器文化の遺跡を含めて，再度考えなくてはならないと思っている。この拙文は先に挙げたATとナイフ形石器文化との課題に対するアプローチへの一つの予察である。

謝辞

この拙文を書くにあたって，宮崎市教育委員会の野間重孝氏を始めとする教育委員会の皆様，延岡市教育委員会の山田聡氏，それに別府大学卒業生の高松永治氏・宮下貴浩氏，別府大学史学科

の鎌田洋昭君にお世話になった。銘記して感謝の意を表したい。

主要参考文献

橘　昌信　「宮崎県船野遺跡における細石器文化の様相」考古学論叢 3 1975

宮崎県教育委員会　「堂地西遺跡」　宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第 2 集 1985

田野町教育委員会　「芳ケ迫第 1 遺跡」　田野町文化財調査報告書　第 1 集　1984

延岡市教育委員会　「赤木遺跡発掘調査概要報告」　延岡市文化財調査報告書Ⅲ 1987

宮崎県教育委員会　「地蔵ケ森遺跡（広域農道建設事業に伴う発掘調査）」　宮崎県文化財調査報告書第 31 集　1988

宮崎県教育委員会　「地蔵ケ森遺跡発掘調査について」 昭和 63 年度宮崎県埋蔵文化財講座資料　1989

宮崎県教育委員会　「林遺跡（一般国道 10 号土々呂バイパス建設工事に伴う発掘調査概略）」宮崎県文化財調査報告書第 31 集　1988

宮崎県　「宮崎県の自然環境」「先土器時代」『宮崎県史一資料編考古Ⅰ』 1989

山田　聡　「片田遺跡の発掘調査について」　宮崎県考古学会発表資料 1990

宮崎市教育委員会　「金剛寺原第 1 遺跡・金剛寺原第 2 遺跡」　宮崎市文化財調査報告書　1990（予定）

延岡市教育委員会　「片田遺跡（概報）」　延岡市文化財調査報告書第 5 集　1990（予定）